
屍たちの鎮魂歌

青色一號

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

屍たちの鎮魂歌

【Nコード】

N7259Y

【作者名】

青色一號

【あらすじ】

地方都市、中野原市に住むオタクな高校生。浦島秀明はある日、自宅の押入れから祖父の猟銃を見つける。その日を境に、彼らの日常は終わった……。突如街中に謎のウイルスに感染し凶暴化した人間が現れた、感情を失い人が人を食う。瞬く間に感染者は広がり、世界は終わりの始まりを迎えた。全てが血に染まった世界。彼らの生死を賭けたサバイバルゲームが、今、始まる……。

NO.1 最後の日の夜

ある日の朝、俺はいつもどおりに目が覚めた。
やかましく耳元で鳴る目覚まし時計を、布団から手を伸ばして止めた。

カチツ

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

布団から起き上がった俺はメガネを取り、気がつくとアニメの美少女キャラの抱き枕を抱いていた。

そう、俺はオタクだ。

俺は浦島秀明^{うらしまひであき}、しがない平凡な高校生にして二次元美少女と銃器が大好きなオタクだ。

地方都市郊外の田舎町、中野原市美空町に住んでいる。回りを山に囲まれ自宅の周りには田畑が広がり、近くに雑貨とたばこを扱うだけの小さな商店があるのみ……。

俺の家は父さんの実家で、両親は俺がまだ幼い頃に不慮の事故で亡くなり、以来俺は生まれ育ったこの家で、唯一の俺の保護者である祖父に育てられた。

祖父が農家をやっているということで俺は大きな家に住んでいる。

畳十条和室の大きな部屋の棚には、いろいろなアニメやゲームの美少女キャラのフィギュアが並び、部屋の戸には俺の大好きなアニメ「魔法少女まじかるマリンちゃん」のポスターが貼ってある。

マンガ本の棚の横にはAK47カラシニコフ銃の改造モデルガンとボウガンが立てかけてあって、それがある以外はごく普通の今時の男子高校生の部屋といった感じた。

身体がすごくだるい、それもそうだ。このところずっと徹夜でギャルゲーをプレイしていたのだから……。

俺はふとため息をついた。

「……さて、学校逝くか。と、その前に餌やりやらねーとな」

だるい、そしてだるい。果てしなくだるい。

玄関の戸を閉め外に出て俺は玄関の前にカバンを置き、鯉のえさの袋とニワトリの餌を持って庭の方へと向かうとそこには大きな石灯籠があり、その横には池があった。

池の中には色とりどりの錦鯉達が泳いでおり、その鯉たちは俺を見るなり水面から口をパクパクさせて俺の方に群がってきた。

「はいはい、いま餌やるからな」

小さな石の橋の上から餌を撒くと、鯉たちは一斉に群がって餌を食らった。

鯉の餌やりは俺の毎朝の日課であり、朝のちょっとした楽しみでも

ある。

「まったく、気楽なもんだなあお前らは……俺も来世は鯉に生まれたいもんだぜ」

まったくこいつらときたら、ただ口を馬鹿みてエにパクパクさせてただ餌を食らったあとは何処へ行くわけもなく、ただこの池の中をぐるぐると泳ぎ続け、そして糞を漏らす。

まるで俺の日常そのもののように思えてきた。

次に俺は玄関横の犬小屋で飼っている二匹のニワトリにも餌をやった。

この二匹のニワトリは俺のペットで、名前は唐揚げ、もう一匹は手羽先という。

餌のケースに餌を入れると、唐揚げと手羽先は鯉たちと同様に貪るように餌をついばんでいた。

しかし終に餌の袋がカラになり、俺はストックの餌を取りに自宅裏の倉庫に向かった。

「相変わらず汚ねえなー……父さん死んでから掃除してねーんじゃねのかな……?」

ぶつぶついいながら餌の袋を探していると、突然俺の頭上に細長いボロボロのダンボール箱が落っこちてきた。

「痛ッてエ!!!くそ……なんだよこのガラクタはー!!!」

俺は思わずその箱を開けて中身を見た瞬間絶句した。

箱に入っていたのはなんと上下二連式の猟銃らしきものだった。銃好きの俺は思わずその場で銃を手に取り、石灯笼に向かって銃を構えたりして遊んでいた。

「すげえー！！上下二連のオーバーアンダーショットガンだ！！こんなのだこのモデルガンのメーカーでも作ってねーぞww」

俺はしばらく銃を振り回してハイテンションになっていた。

しかしニワトリの餌のことを思い出し、俺はすぐに銃を元の箱に仕舞うとそのまま箱を自分の部屋の押入れに持って行って隠した。その後すぐに餌を持って行ってニワトリたちに与えた。

そしてまた二匹のニワトリは餌をついばむ。その様子を見ながら俺はふと空を見上げた。

「はぁ………眠イ。」

下らないことを考えた。俺はカバンを取りに玄関へと戻った。

ちよつとそこへ朝の散歩から祖父が帰ってきた。

「秀明、もう学校行く時間かい？」

「ああ、じいちゃん〜おかえり！そんじゃ逝ってきますー。」

「気をつけていっておいで！」

祖父は昔から俺を溺愛してくれてて、それはありがたいことでもあるがそれがかえって少し迷惑に思っていた。

家を出て俺は一人通学路をとぼとぼと重い足取りで歩いていると。そこへ同じクラスの俺の幼い頃からの友達の滝川昂たきがわすばるが、俺を見つけて駆けつけてきた。

「おはよう秀明ー、」

「滝川おはよう……」

「相変わらずお前顔色悪いな、なあ……お前なんでいつもそんな死んだ魚みたいなやる気のなさそーうな目つきしてんだ？」

「生まれつきだよ、だから何だよ？……」

「また徹夜でギャルゲーか？」

「何故バレたし!？」

「分かるわそのぐらい!何年つるんできてると思ってるんだ」

「はいはい……」

目の前を同じ学校の女子が通っていくのが見え、それを見た滝川はそれに反応していた。

「おおっあの子すげえ胸おっきかったなあ!!」

「はいはい……」

俺は呆れた顔で滝川を見た。まったくのん気なヤツだぜ……。まあ、俺も人のこと言えた義理じゃねーけどよ、

「なんだよその顔は！お前は何も感じないのかー!!」

「俺は三次元には興味ねーよ、というか前にも言ったろ。」

「ああ、そうだったなあ・・・」

俺がそう言つと滝川はため息をついた。すると後ろから俺らの幼馴染の宮藤茜^{みやふしあかね}が走ってやってきた。

「おーす！二人ともおはよう！」

「おはよう、宮藤」

「よう宮藤・・・グッドモーニングなう・・・」

「滝川、秀明どうしたの？」

「徹夜でギャルゲーやって今朝は調子悪いんだとさ」

「またのHなゲームやってるの？」

「別にいいだろうが、誰にも迷惑かけてるわけじゃねーんだから」

下らない話を続け、俺と滝川は学校についた。しかしこの高校、女子率が多く俺たちのクラスの半分が女子だからこの上なく気まずい。

俺と滝川は席に着いた。俺は窓側の自分の席に突っ伏していた。

滝川は俺の席の隣に座り、俺は一人寝そべりながら窓の外を眺めた。

「あー、すげえ眠い。果てしなく眠い。」

「そりゃそうだろ、徹夜でぶっ続けてギャルゲーやってたんだから」

「たしかに昨晚はかなりハマりすぎて切り上げるタイミングが途中で分からなくなつてから・・・途中で意識が・・・」

「お前かなりヤバイぞ？流石にエロゲ中毒進行しすぎうだろが」

「まあ自分でも少し自重しようとする努力はしているんだがなあ・・・」

「

「それって、明日から本気出すっていつて結局三日坊主になるとあまり変わらないぞ?」

「やっぱりか? まあ、どうせそれが直ったところで何がどうなるってワケじゃねーしな」

「お前ホントにアンバランスな奴だなあー……まあ昔っからお前はそういう奴だったな」

「まあな!」

するとなにやら教室の黒板側の辺りがやけに騒がしかった、見てみるとクラスの男子連中が騒いでいる様子だった。

それもそのはず、クラスメイトで学園一の美少女。城ヶ崎嘉穂のお出ましだ。

ストレートの長い黒髪を靡かせて彼女は颯爽と教室に入ってきた。しかしまあ三次元に興味のない俺でもたしかに可愛いと思った。

でも見かけによらず若干高飛車な性格で、今まで何人の男子が告げて彼女にフラれてことか。なにしろ彼女のファンクラブまで存在する始末。まあぶっちゃけ俺には関係のない話だ。

「皆さん、ごきげんよう」

「おはようございます! 嘉穂さま!」

「嘉穂さま!」

彼女は無言で一人の側近?(男子)にカバンを差し出すと、側近君は膝についてカバンを受け取り、周りの男子連中も続いて彼女に媚を売る。

「疲れたわ……」

「嘉穂さま！どうぞお座りください！」

「あら、気が利くわね。何だか肩もこるようだけど……」

「嘉穂さま！僕が揉んで差し上げます！」

やれやれ、コイツらときたら……まったく。

俺は呆れた表情でそいつらを見た、なんでそこまで三次元に必死になれるのかまったく理解しかねる。俺のクラスの男子連中の殆どが城ヶ崎のファンクラブの会員で間違いない。

しかしコイツら、俺が見ている限りでは城ヶ崎の奴に良い様に利用されてるだけだし、まったく最近のスイーツはやるのが違う。

ちなみに俺は元からファンクラブなんぞに入る気などさらさらなかったし、クラスでの存在は殆ど目立たない地味な立場なので利用されずに済んだけど、終いにはクラス全員の男子を手玉に取るつもりなのか？

フツ、しかし甘いぞビッチマン！！三次元なんぞにこの俺様が貴様の言いなりになると思ったら大間違いだぜ！！フハハハハッ！！俺は心のそこでそう呟き、高笑いを上げた。そして不適な笑みを浮かべて彼女の方を見つめた。

「まったくなによ〜！ちょっとかわいいからっていい気になってえ〜！」

おーつと？なにやら俺の隣の班のメガネをかけたキモデブ腐女子、

檀原信子。別名、かしはらのぶいブタ原が突然独り言を呟きはじめてぞ？

檀原はクラスのスイーツ腐女子グループの親玉でオマケにBL好きの釜掘りマスター、俺はコイツが嫌いだ。

何故嫌いなのかといえば、先ず一つ目に俺はBLが嫌いだ。それにコイツは他のクラスの女子にもBL（通称、Tウイルス）をばら撒いて感染者を増やしてやがるんだ！！

オマケにコイツ、アニメのBLだけでは飽き足らずクラスの中の良い同士の男子を腐妄想のオカズにしているそうで、俺と滝川もその被害者だ。

偶然、檀原の妄想キモキモ話をクラスの女子と話しているのを聞いてしまい、それ以来俺は差別の眼差しでヤツを見るようになり、BLを毛嫌いするようになった。

ちなみに俺はヤツに対抗して百合萌え一筋だ。

彼女が席に着いたところで教室に先生が入ってきたので、周りにいた男子連中は木の葉を散らすように自分の席に付いた。

「出席を取るぞー！全員席につけー」

こうして当たり前のような日常が続いてゆくものだと俺は思っていた……。

このときまでは……。

世界はこのとき既に俺たちの知らないところで崩壊を始めていた。しかし俺はそんなこと知る由も無く、ただ一人休み時間に学校の屋上で缶ジュースのゲロ甘コーヒーを飲みながら仰向けになり空を眺めていた。

青空の中に流れる雲を俺は死んだ魚のような目で見つめていた。

「まったく……どいつもコイツも……。」

まったく今の世の中ろくでもないことばかりだ。政治家どもは己の欲望を満たし、金にモノを言わせる。そして毎週日曜の昼過ぎのテレビでは必ず特定のチャンネルでやっている障害者特集。ぶっちゃけうざい。媚を売り同情を買わせて偽善者を増やすだけのただのクソ番組だ。まったく土日の午後はろくな番組がやってねエ……。

別にテレビの話をしてるんじゃない。俺はそんな世の中、メディアに失望しているんだ。

おまけに学校ではスイーツと腐女子、ホント頼もしいよ。

所詮、この世界にあるのは理屈と幻想。期待するだけ無駄なことが多い……だから俺はあまり世の中に期待しなくなった。するだけ無駄なんだよ……。

「よう秀明ー、ここにいたか！」

「あ？なんだ滝川か」

そこへ滝川がペットボトルのお茶を持ってやってきた。

滝川も俺の隣に仰向けになって空を見た。

「今日は良い天気だな」

「だからー？」

俺は興味なさげにそう答えた。

青空を流れる雲は、少しずつ形を変えながら変化してゆく。もともと雲なんて水蒸気かなんかの集まりで、科学的にどうのこうのってヤツだろう……。それがただ空に浮いて流れているだけの話さ。

「それだけさ……」

「そうか、なあ……。滝川よ……」

「何だ？」

「だるいし次の授業サボらねえ？」

「俺は別に構わんが、お前は成績ヤバいから出ないとダメんじゃないのか？」

「うーん……。まあそんなだけどさ、なんかもう面倒くさくなっちゃってよ……」

「ブタ原のことか？……。気持ちは分かるが、でもこのままだとお前確実に留年だぞ？」

「そうか……。そりゃ愉快だな」

「愉快じゃねーだろww」

飛行機雲が流れる空を見ながら俺と滝川が下らん話をしていたところへ、突然宮藤がやってきた。

「あー二人ともやつぱりここに居たかー！もう授業始まっちゃおうよ？」

「なんだ宮藤か、何用かな？」

「それじゃ秀明、俺先に教室戻るわ！」

「おう、頑張つてこいよ」

「アンタもくるのよ!！」

ゴチンッ!！」

宮藤の鉄拳炸裂、おかげさまで俺の頭には大きなたんこぶが出来ました。

やってくれるねエ、宮藤さん。まあコイツは幼稚園の頃からの付き合いなんでスイーツ呼ばわりするのは失礼に値するので一応特別な名前で呼んでおります。

マッド・プリンセス
狂気神姫

しかしそれを本人に言えば間違いなく俺は殺されるので心の奥底に深く沈めておきましょう。

その後、俺は宮藤に言われるがままに授業に出た。まあ、出たとはいつても殆ど窓の外をボーッと眺めたり教科書やノートの端にパラパラ漫画を描いたりして過していただけなので、もちろん授業には参加しているようで参加はしていなのだ!

眠気が限界に達した頃、その眠気を吹き飛ばすように授業終了のチャイムが鳴り渡った。

ホームルームが終わり、俺はカバンに持ってきた漫画雑誌だけを入れてほかの教科書やノートは机の引き出しに入れた。

「秀明、いつしよに帰ろうぜ」

「ああ」

俺と滝川が教室を出ようとしたとき、教室に城ヶ崎が走って戻って

きた。どうやら忘れ物でもしたのだろうか？すると彼女は机の脚に引っかかりそのまま転んでしまった。

その時偶然か俺と城ヶ崎の目が合い、俺はすぐに目を背けて相手にしないように教室をさっさと後にした。

やべエ！！スイーツと目が合った！！怖い！！俺もアイツに利用されるのか！？

勝手に自分の中で自意識過剰になりすぎていた、まあありはしないことだろうけど……。

俺と滝川は下駄箱で上履きを履き変えていると、後から宮藤が後からやってきた。

「ちょっとー！二人ともおいていかないでよー！」

「あれ宮藤、お前今日当番か？」

「いやあさあ、古文の西岡に捕まっちゃって荷物運び手伝わされちゃったの！」

「アイツに関わるとろくなことねーからなあ……………」

「それじゃあ帰ろうぜ」

「おい待てよ！滝川！」

「ちよっと二人ともいきなり走んだいでっ！」

「早くこいよー！」

こうしていつもの日常がいつもどおりに終わっていた。

しかし、これからまさか本当の終わりというものが始まるうとは誰もまだこの時までには知る由もなかった……………。

その日の夜、俺はいつもどおり居間で祖父といっしょにテレビを見ながら晩飯を食べていた。
相変わらず最近のテレビのバラエティー番組は面白くない・・・
芸能人の恋バナばかり、チャンネルを回しても他に面白い番組もやっていない。

俺はため息をついてリモコンを置き、仕方なく面白くもないそのバラエティー番組を見ていた。

「うち！・・・くそ番組ばかり・・・」
「どうした秀明、なにか学校で嫌なことでもあったのか？」
「えッ？あツいや・・・なんでもないよじいちゃん」
「そうか、それならいいがな・・・ホレ、はよ食わんと飯が冷めちまうで？」
「分かってるよ！」

この番組早く終らねーかな？いつになったら最終回迎えるのだろうか
と考えていたときだった。

突然、テレビ画面の上にニュース速報が流れてきた。

ピローンピローン

（NNSニュース速報） 今日7時頃、東京都西新宿で交通事故、
タンクローリーが大爆発、11人が死亡。26名が意識不明の重体。

テロップが流れてからしばらくすると、突然テレビの画面がニュースに変わった。

「くえー番組の途中ですが、ここで臨時ニュースをお伝えします！ 今日7頃、東京都西新宿一丁目のヨトハシ百貨店前で車両数台を巻き込む事故があり、右折しようとしたタンクローリーが爆発炎上し、11人が死亡、26名が意識不明となる事故が起きました。」

「何だあ？」

「東京の方でまた事故だとさ……この間も人身事故がニュースになってたみたいけど」

しかしおかしい、最近はこの様なニュースばかりだ。この前は桜木町で電車の横転事後がニュースになったばかりなのに、ここ最近本当におかしい……。

俺は晩飯を食い終わると、食器を流しに持っていくとそのまま自分の部屋に戻ってパソコンを立ち上げた。

「さてと……板の様子でも覗いてみますかな」

某掲示板サイトを開くと、なにやら様子がおかしいことに気がついた。

164 名前：名無しのジョニー 20xx/4/15(Tue)

17:44 ID:eyUU6qrXSnI

吉祥寺で傷害事件発生中！カップルが襲われてざまあwww

165 名前：名無しの必殺仕事人 20xx/4/15(Tue)

17:54 ID:gl1xwGxyc5s

<<164ニユースでやってたな、でもあれってネタじゃねーの？

166 名前:名無しのジヨニー 20xx/4/15(Tue)

19:18 ID:eyU6qrXSnI

<<165俺も襲われたし、俺の場合は突然相手に噛み付かれて血が出たw

ていうか、あれはガチでやべエ!!

167 名前:名も無き詩人 20xx/4/15(Tue) 2

0:48 ID:eRbeCjxYhMW

<<166メシウマwwwwww

168 名前:名無しの必殺仕事人 20xx/4/15(Tue)

17:54 ID:gl1xwGxyc5s

巻き込まれてんじゃねーかwwwまだ痛むのか？

169 名前:名無しのジヨニー 20xx/4/15(Tue)

19:18 ID:eyU6qrXSnI

<<168今はまったく痛みを感じないけど噛まれたところがなんかすげえ紫っぽい色になっててヤバイ

病院逝った方がいいか？

170 名前:名無しの必殺仕事人 20xx/4/15(Tue)

17:54 ID:gl1xwGxyc5s

<<169逝ってこい

171 名前:先生、バナナはおかずに入りますか？ 20xx/

4/19(Sat) 10:04 ID:PreVaiRBCu

俺もさつき噛まれました

172 名前：名無しの必殺仕事人 20xx/4/15 (Tue)
17:54 ID:gl1xwgy5s
<<171おめでとぅございます。

「なんだこりゃ・・・？こりゃ確実にネタだな」

アホらしくなった俺はパソコンの電源を落とすとさっさと風呂に入
って布団に包まって眠りについた。
多分これが俺が安心して眠れる最後の夜になるうとは、俺はまだ知
らなかった。

NO・2 終わりの始まり(前書き)

当たり前のように過していた日常が、ある日を境に大きく変わった。

「バーン。」

以上で俺の精神統一は終了。俺は再び猟銃を箱に戻し、押入れの奥に仕舞った。

しかし俺がまさか本物の銃を手にするとは思ってもいなかった・・・
・夢が一つ叶ったと言っても過言ではない。

俺はとりあえず部屋を出て一階の流しに向かうと、流しでうがいと歯磨きをした後冷蔵庫から魚肉ソーセージを一本取り出してそれを朝食代わりに食っていた。

「まったく、なんでソーセージの袋ってこんなに開けづらいんだ？
死ねばいいのに・・・」

いつもの独り言を呟きながら俺は居間へと移動、テレビを点けると朝のニュース番組が流れていた。

しかし何か様子がおかしかった。
見てみると、なにやら国のお偉いさん見たいな人が会見を開いており、なにやら神妙な面持ちでマスコミや視聴者に伝えている様子だった。

「〃現在政府が対策会議を開いております、東京都並びに他の地方の方々にご迷惑をお掛けします。もうしばらくお待ちいただいております・・・」

他にチャンネルを回してもどこも同じ会見を放送していた。

「なんだこりゃ……どこも同じ会見ばかり放送してんな……
あッ！唐揚げと手羽先に餌あげないとな……」

俺はテレビをつけばなしにしたまま餌の袋を持って外に出た。
玄関横の鳥小屋の中を覗くと、なにやら手羽先の様子がおかしかった。おまけに唐揚げの姿が見えない。

「グルルルルルルルルルル……」

「手羽先？」

「グルルルルルルルルル……」

「おい手羽先……大丈夫か？」

横になったまま身体を震わせて突然口から血を吐き出した。
驚いた俺は思わず後ろにのけぞってしまった。

「うわぁッ！！て……手羽先！！おいどうしたんだ？」

手羽先の身体をよく見てみると片端が何者かに食いちぎられており、側には血がついた餌の器が転がっていた。
辺りを見回すも、唐揚げの姿は見えない。一体何があったのかまったく分からず、俺は唐揚げを探し回って裏庭まで来たが、やはり姿が見えない。

「まさかイノシシにでも食われたか……手羽先もあのありさまだし……」

俺は裏庭から玄関の方へと戻っていると家の門の前に人影が見えたのでよく見てみるとその人影の正体は祖父だった。朝の散歩を終えて帰ってきたのだろつか、だがしかし何か様子が変だ。

「あーおかえりじいちゃん！……ん？じいちゃん？」
「……………」

話しかけてもなにも反応しない、下をうつむいたまま身体を小刻みにゆらゆらとゆらしていて不気味すぎる。

「じいちゃんどうしたんだ！？腕から血が……………！」
「……………」
「ちよつとまつてて、今薬取ってくるから！！！」

よく見ると、祖父の右腕に何者かによつた噛まれたような傷が付いており、血が出ていたので俺は慌てて家に救急箱を取りに戻った。

俺は居間の茶箆笥の上にある古びた薬箱とつて中を探すも、消毒薬のようなものは入ってなかった。

「くそ！消毒薬は何処だ！！！」

居間の隣の祖父の部屋に入った俺は、部屋の押入れを物色して救急箱を探した。たしかウチには救急箱がもう一つあってそれに消毒薬

が入っていたはずだった。
いろいろ物色していると突然ありえないものまで出てきたので目を疑った。

「これは！あの猟銃の弾だ！！」

実包十二発入りの箱が三つ押入れの奥から出てきたのだ。三つのうちの一つの箱には弾丸は八発残っていた。

その時、突然玄関のほうから物音が聞こえたので見に行ってみると祖父がありえない行動をしていたのだ。

なんと負傷していた手羽先の頭を食いちぎっていて俺は思わず言葉を失った。

「じ……じいちゃん……なにしてんだよ……」
「ギャ後jkテkgrじえhじえtdfghjkyknt@」

一体何を言っているのか意味不明、ていうかこの時点で理解不能な行動を取っている……なにこれ怖い。

尋常じゃないその行動、俺は怖くなって二階の自分の部屋に戻ると何を考えているのか自分でも分からずに押入れからあの猟銃を取り出した。

猟銃とボウガンを持って階段を下りると、祖父が血まみれの姿で玄関にたたずんでいて左手には首を食いちぎられた手羽先が握られていて血がポタポタと玄関の床に落ちていた。

「ひいひいひいー……ッ!!」

俺は思わず腰を抜かし、銃とボウガンを抱えて居間の方へと逃げ込んだ。

すると血まみれの祖父はそれを見て首の無い手羽先を片手につかんだまま家の中へと上がってきた。

とっさにボウガンを構え、矢をセットした。そして部屋の襖からゆつくりと口から血を垂らしながら足を引きずって俺の方へとゆつくり近づいてきた。

「ああ……うおgetじ……」

「じっ……じいちゃん!! 一体どうしちゃったんだよッ!!」

「ぐおーゲkyーらーyk;いおフてふいお」

「じいちゃん……」

祖父の目は完全に白目を向いており、まるで死人が死んでもなお活動しているような姿だった。そう……まるでゾンビのような……。

その時、突然祖父の手が俺をつかもうとしてきたので俺は思わずボウガンを発射してしまった。

矢は祖父の右肩に刺さったが悲鳴も上げず、まるでまったく痛みを感じていない様子だ。

俺はボウガンを捨て、怖さのあまり畳の上で腰をぬかして座り込んでしまった。

「うわああー!!」

「ぐおおおーggぢjryjldkじえr!!」

「ちょ……ちょまッ!!?嫌ッえ……まって!!」

ビビりまくる俺、だがしかしゾンビと化した祖父には俺の言葉はなにも通じてはいなかった……。

俺は後ろにのけぞり、ケツを引きずりながら隣の祖父の部屋に追い詰められていた。

「うわああー!!ちょっと……ちょっとまってッ!!」

刹那、手に何か当たり手元を見るとさつき出した猟銃の弾が畳の上に散らばっていた。

俺はとつさに猟銃をつかむと、転がっていた弾丸を二発拾いパニックになりながら使い方は知っていたので銃の機関部を開き銃身に弾を二発込めると、機関部を戻して近づく祖父ゾンビに銃口を向けた。

「くッ……くるなッ!!撃つぞ!!」

これはもう俺の知っている祖父じゃない、俺はなんとなく分かっていたが恐怖とパニックのあまり銃を持つ手が震えた。

「おえthsjtlyr:う:くk」

「やめるオッ!!じいちゃん!!」

「Erftgyふじtpつきおoお……」

「頼むよ……目を覚ましてくれよ……!!」

わかってはいても、理解できなかった。

そしてしかしその時、祖父ゾンビは俺に向かって飛び掛ろうとしてきた。

「おおおおおghえhtrjyrj」

「うわあああああーッ!!!!」

俺は目をつぶった。次の瞬間、俺は恐怖のあまり引き金を引いてしまった。

ドガアアアーンッ!!!!

刹那、一発の大きな銃声とともに部屋は返り血に染まり、反動で吹っ飛ばされた祖父は居間の畳の上に倒れて頭がすっかり無くなっていった。

俺は銃を持ったまましばらく放心状態になり、その場から一步も動けず声が出なかった。

そもそも何が起こったのか理解できないでいた。ただ銃口からは白い煙が静に立ち上っていた。

「どうなんてんだよ……一体……」

祖父の部屋に戻ると、畳の上に散らばっていた弾丸をかき集めて台所からサラシラップを持ってくると、俺はそのまま六発の弾丸をラップに包んでジャージのポケットに入れた。

その後また居間に戻り、祖父の死体の横に落ちていたボウガンを拾い上げるとそれに矢をセットして俺はサンダルのままボウガンと猟銃を持って家を出た。

だがしかし家を出た瞬間、目の前に広がる光景に言葉を失った。

「なんだよこれ……」

家の前の畑に乗用車が突っ込んでおり、車のドアの隙間から運転手のものか、血まみれの腕が出ていた。

さらに周囲を見渡すと向こうの民家から煙が立ち上っており、他にもあちこちでパトカーや救急車、消防車のサイレンの音が聞こえていた。

「一体何がどうなんてんだ……?」

途方に暮れていると、突然向こうから同じようなゾンビが俺の方に向かって走ってきたから驚きだ。

俺はそれを見るなり全力で走り出した。

「うわあああーッ!!」

「ざwんひゅじk1ぷむよ18p」

逃げる俺、追いかけてくるゾンビ。俺は必死になって畑の間の農道を駆け抜けた。

「こつちくんない!!」

「pp期おじえthyrrjkひりいえw」

しかし俺は小石に躓き、ありがちなベタな方法で転んでしまった。あ大変。飛び掛るゾンビに向かって俺はボウガンを放つ。

矢は頭に突き刺さるもまったく効果はなく、ゾンビはつかみ掛かり俺は押し倒された。

「ボsgレjhtri8r6l97zsdfrdf tj」

「つぐッ!!.....離せッこの野郎!!」

俺は乗りかかるゾンビめがけてボウガンを放つ、矢は目に突き刺さりゾンビの動きが鈍った。

その隙にゾンビを足で蹴り、急いでその場から逃げ出した。

「くそッなんだんだよアイツら!!」

また逃げる俺、そもそも俺は何処に向かって逃げているんだ？祖父を殺したシヨックで思わず家から逃げ出したのまではいいが、その後の事までは考えてはいなかった。

気がつけば、俺は二人の人間を殺してしまったのか？とにかく俺は走るしかなかった。

しばらく走ったところで、交差点付近のコンビニの近くまでやってきていた。

そかしそこでの光景もまさに地獄のような景色だった。交差点では車が横転し、数人のゾンビがゆらゆらと歩き回っている状況だった。辺りからは悲鳴とガラスの割れるような音が聞こえた、おそらく都市部の方の街中が全部こんな状況なのか？

コンビニの駐車場に止まっているワゴン車の影から辺りを窺うと、車の前でゾンビが倒れた死体の腹を割いて内臓を食らう姿が目に入り、俺は思わず吐きそうになった。ダメだ……。これ以上ここにいと精神的におかしくなりそうだ……。

しかしいつまでもここでじっとしているワケにもいかず、俺はとりあえずこのまま学校へ行くことにした。

NO・2 終わりの始まり（後書き）

ゾンビから逃げ惑いながらも秀明は一人学校を目指す。
そこで待ち受けるものは果たして・・・

NO.3 感染者は二度死ぬ

秀明がちょうどまだ家に居る頃、朝のホームルームの時間帯に学校では既に異変が起こり始めていた。

一時間目が始まる前、教室では城ヶ崎のファンクラブの男子の一人の様子がおかしかった。

しかし殆どの生徒は気がつかず、その男子は気分が悪そうにしていた。

それに気がついたのは彼の隣の学級委員長の女子だった。

「内山くん、大丈夫？気分悪そうだけど・・・」

「・・・なんでもないよ・・・」

そう答えるも、腕や首筋に血管が浮き上がりとても大丈夫ではなかった。

騒ぎだす周囲に、滝川と宮藤も気になり始めた。

「なんだ？」

滝川は自分の席から騒いでいる黒板側の方の辺りを何があったのか気になって覗き込んでみると側に宮藤が席を立ててやってきた。

「滝川ー」

「おお宮藤、」

「何かあったの？さつきから騒いでるみたいだけど・・・」

「俺にもよくわかんないけど、なんか城ヶ崎の側近が調子悪いみたいで今、委員長が保健室に連れて行くところみたい」

「ふーん・・・あッそういや秀明は？まだ学校来てないみたいだけど・・・また遅刻？」

「俺も今朝から見えてねーけど、アイツのことだからまた夜通しゲームでもやってたんだろ」

そんなことを話していた時、突然教室の外から悲鳴が聞こえクラス内が騒然となった。

「キヤーーッ！！」

「！！？」

「なんだ今の悲鳴は！？」

「廊下のほうからしたぞ！！」

「何今の？」

クラス中が騒ぎ出した、滝川と宮藤はギャラリィに混じって廊下に顔を出して見てみたがその光景に廊下に出て見た他の生徒たちは騒ぎ、悲鳴を上げた。

廊下に出た滝川と宮藤も例外ではなかった。

「キヤーー！！！！」

「うわあああー！！たッ誰か先生呼んで来い！！」

「ちよつと……滝川、アレ……」

「なんだ……これは！！」

隣のクラス一人の男子生徒が同じクラスの男子の首に噛み付き、教室内には他にも数人の女子や男子が倒れていた。あるものは腕をものがれ、あるものは足をものがれ。教室はもちろん廊下まで血だらけになつてた。

その男子の姿は既に人間とは思えない凶暴さだつた。

彼は感染していたのだ……。

衝撃のあまり、宮藤は悲鳴を上げた。

刹那、ゾンビは廊下に出ていた生徒に飛び掛り、生徒達は悲鳴をあげ逃げ惑い逃げ遅れた者や足の遅い者を突き飛ばして走つた。

「うわああー！！」

「キヤー！！」

「どけーッ！！邪魔だよ！！」

「何だよアレ！！」

「ちよつと押さないでよ！！」

「うわあああー！！殺される！！」

「誰か警察に電話しろよ！！」

逃げ惑う生徒の中に城ヶ崎の姿もあったが、ファンクラブの男子は彼女を見捨てて逃げてしまった。

「あッ!!痛ッ!ちょっと待ちなさいよ!!私を見捨てるなんて許さないわよッ!!」

「助けてえー!!」

「逃げろー!!」

一方で滝川と宮藤は教室に一旦逃げ込み、ドアに鍵をかけると城ヶ崎意外の残った生徒たちで机でバリーケードを築き入り口を塞いだ。

「そつちも塞げ!!」

「早く!!」

教室内に残されたのは滝川と宮藤、そして委員長と側近、城ヶ崎とブタ原の6人だけになった。

入り口の向こう側からゾンビがバンバンとトアを激しく叩く音が響く、その音に全員が恐怖した。

「なッなんだよあれ!!人が人を食ってたぞ!!」

「一体なにが起こっているの?」

滝川と宮藤がそう言うてからしばらく沈黙が続き、突然窓の外から大きな爆発音が聞こえたので外を見ると向こうのガソリンスタンドから黒煙が上がっているのが見え、他にも救急車や消防車のサイレンの音が聞こえてきた。尋常じゃないこの事態に滝川は携帯を取り出して秀明の携帯に電話をしたが繋がらない。

「クソッ！ダメだ……秀明出ないよ……」

「今の爆発は……？」

「交差点横のガソリンスタンドだろうな……でも何で……」

滝川と宮藤が二人で話していると、そこへ割るように城ヶ崎が乱入してきた。

「ちよつとあなた達！！一体何が起こっているの！？さっきの男子の行動はなによ！！」

城ヶ崎が滝川に詰め寄る、しかし滝川もこの時点で何が起こっているのかわからず質問には答えられないでいた。

37

「しッ知らないよ！今俺も連絡取ろうとしてるけど電話が繋がらないんだ！！」

「はッ！なんてこと……最悪よ！」

高飛車お嬢様な城ヶ崎に滝川と宮藤は困っていた。

「宮藤、おまえの携帯はどうだ？繋がる……？」

「ダメ……私のも全然繋がらない……」

「一体何が起こってるんだ……？それにさっきの映画のゾンビみたいなの……」

ブタ原も携帯で表に連絡を取ろうとしたがやはり繋がらない様子だ

った。

「だめよオ、私のも繋がらなあーい！！！」

気持ちの悪い口調でそう答えた、滝川はスルー。

その時委員長の子が悲鳴をあげ、驚いた四人が後ろを振り返ると信じられないことに口から血を吐き、委員長の女子の首元に噛み付き、その子は必死に暴れるも凶暴化した側近に押さえ込まれて身動きが取れなかった。

「ギヤアアアアーツ！！嫌ア！！痛い！！痛いツ！！」

「ちよつとなにやってるのよ内山くん！！」

「うそ・・・そんな・・・」

「ちよつとオ！！内山ア！！離れなさいよオ！！」

側近の行動に怒鳴る城ヶ崎、宮藤は滝川の後ろに下がり、ブタ原が痛がる委員長から側近を離そうとつかみかかろうとした。

しかし刹那、逆につかみかかった側近はブタ原の片腕に噛み付き。

ブタ原はその名に似合う悲鳴をあげ、床の上に転がった。

「ギヤアアアアーツ！！痛いツ痛いわぁーツ！！」

「カツ檀原さん！！」

「ブタ原が噛まれた！！」

しかし次の瞬間、バリケードが破られて教室にゾンビと化した生徒

が四人、トアを破り椅子をなぎ倒して入ってきた。とっさに滝川は宮藤をかばうように身体を床に伏せてじっとした。するとゾンビたちは滝川たちには見向きもせず、倒れたブタ原にむかって飛び掛り、そして肉を食らった。

「嫌!!来ないでえ!!嫌アアアッ!!助けてええー!!ギヤアアアアアッ!!」
「ひッ!」

城ヶ崎はとっさの行動で教室から逃げ出そうとする、しかしゾンビ化した側近は奇声を上げて彼女の肉を食らおうとその後を追いかけて走り出した。

「宮藤、今のうちにここを出よう・・・」
「うん・・・」

「嫌アア!!助けて!!殺さないでアアッ gggit がああああ!!」
ゾンビたちがブタ原に夢中になっている。
隙を見計らい、滝川と宮藤は教室を出て廊下を走った。

しかし廊下のところどころに血の跡やゾンビにやられて無残な姿で倒れた生徒たちが何人も倒れこんでいた。さらに他のクラスの生徒たちがゾンビと化した他の生徒をバットで殴ったりしている光景も目に入った。

「はア・・・はア・・・」
「これ嘘でしょ!?!」

「映画より酷い……とにかく今は学校から出ないと!!」

「どうしよう滝川……電話もメールもまったく繋がらない……」

「恐らくみんなこの騒ぎだ、通話回線がどこもパンクして繋がりにくくなっているんだ。」

「家に連絡しないと!お母さんが心配になってきた!」

「……こういう場合は公衆電話が一番いいらしい!学校に公衆電話ってあったか?」

「たしか!一階の職員室の前にあったわ!」

「とりあえずそこに急ごう!」

「うん!」

その頃、一人教室から逃げ出した城ヶ崎は階段を駆け下りて一階に降りると、一目散に昇降口から外に出て部室棟の方に走っていった。しかし側近ゾンビはまだ城ヶ崎を追い掛け回す、彼女は悲鳴を上げて走った。

「ギヤアアーツ!!誰か助けてえーツ!!」

「ぎいテjつfrdyレsy6ウ76いxcvbgdghjきお
「p」

「嫌アアアー!!!!」

「危ない!伏せて!」

すると悲鳴を聞きつけた野球部のイケメン部長の森川健一が金属バットを持って駆けつけると、走ってきた側近ゾンビを思いっきりフルスイングで殴り倒した。

「こいつめ!!!!」

バコッ!!

「ぎい「うッ!!」

側近ゾンビはその場に倒れ、城ヶ崎はその場に思わず座り込んだ。

「大丈夫かい!？」

「森川くん!はッ・・・はい私は・・・ありがとう、助かったわ」

「よかった、ここは危険だ。俺の部室に來い!そこなら安全だ」

「はい!」

しかしその時、まだ生きていた側近ゾンビが森川の足首に噛み付いた。

森川はとっさにバットで頭を叩き潰してトドメをさした。

「痛ッ・・・!!」

「森川くん!」

「大丈夫だ、ちょっと噛まれただけさ・・・」

ちょうどそこへ校舎から出てきた滝川と宮藤に出合った。

「森川!!」

「昂か!お前も無事だったか・・・」

「城ヶ崎さんも!」

「ああ、なんとかな・・・さっき宮藤と職員室前の公衆電話のと

ころまで行つたんだが受話器のコードが切れてて通話できなかったよ、森川、お前他に連絡が取れるところ知らないか？」
「えッたしか一番近くの公衆電話は交差点横のバス停横にあったはずだ・・・」

いつまでも話していると校舎から四人ゾンビが出てきて滝川たちの方に向かつて走ってきた。

驚いた城ヶ崎はまた滝川たちから離れ、一人校舎の中へと逃げていつてしまった。

「ギヤアアアーツ!!」

「うわああああ!!」

「こんなところで話してる場合じゃないな・・・」

「ちよつと城ヶ崎さん!!」

「ここは危険だ!皆部室棟の方に!!」

「ぎい w g れ h t h s s j け ば き g t h あ!!」

滝川と宮藤、そして森川の三人は部室棟の方に全力で走る。しかし四人のゾンビは滝川たちをマークしたまま追いかけてくる。しかし反対側からもゾンビが現れ、三人はゾンビに囲まれてしまった。

「うああ!!かッ 囲まれた!!」

「くそう!!一体何だよコイツら!!」

森川は金属バットを構え、滝川は武器代わりにどこからか拾ってきた

た鉄パイプを構え、宮藤を守る形で背中を合わせていた。

「ギョオー！t h r t 6 d h がガガ画 b g h じゅい j 8 9 8 y お p
「ひッ！！」

その時、校門を飛び越えて誰かがゾンビに追いかけてられて校庭に入ってくる姿があった。

秀明だった……。

猟銃を抱え、ボウガンを背負って一人校庭のグラウンドをゾンビに追い掛け回されていた。

「うわああーッ！！こっち来んなああーッ！！」

「ザhじゅk l、p m じ・うーッぽぽ……いざ x s c d f g h んろ

b！！！！」

「はあ……はあ……はあ……はあ……くックソ！！」

飛びかろうとしてくるゾンビを秀明はとっさに猟銃の銃床を使って殴り倒した。

その隙に秀明は校舎裏の方に逃げ、滝川たちの安否を確かめるためにゾンビから隠れながら探し回った。

滝川たちはその頃、未だにゾンビに囲まれている状況でゾンビは今にも飛び掛る寸前だった。

宮藤は怯え、滝川は鉄パイプを握り締めて死を覚悟した。

「ダメだ……完全に逃げ場がない……」

「ああ……ああ……」

「つぐ！畜生！こんなところで俺たちは死ぬのかッ!？」

「qznhじゅ；pほがががggggggggggggあ!?!」

「ここまでか……!?!つぐ!?!」

刹那、一人のゾンビが滝川たちに飛び掛ろうとした時だった。

秀明が猟銃の銃床でゾンビの後頭部を殴りつけたのだ。

「おらアッ!?!」

ドカツ!!

「秀明ツ!?!?」

「滝川ツ宮藤!?!無事がツ!?!」

この隙に森川と滝川はそれぞれ金属バットと鉄パイプで残りのゾンビを片付け、四人は部室棟の野球部の部室に逃げ込こみドアに内側から鍵をした。

「秀明！ありがとう助かったぜ……」

「ああ、お前らも無事で何よりだ……」

「お前大丈夫だったか？」

「なんとかな……それより一体何が起こってるんだ？ここま

で来る間にゾンビみたいな連中に追いかけて大変だったんだが・
・・・」

「さア、俺らも詳しいことはよくわからないんだよ・・・ていう
かお前！その銃は・・・」

三人は驚いたような顔で秀明の猟銃を見つめた。

「モデルガンじゃないぞ、本物のじいちゃんの猟銃・・・。」

「マジかよ！！そいや、お前爺さんはどうしたんだ！！！」

「・・・・・・・・・・。」

滝川のその質問に秀明は口を閉じた、分かっではいたことだったが
やはり夢じゃなかった。

「まさか・・・お前！」

「仕方なかったんだ！！じいちゃん何だがいつもと様子がおかしく
て・・・俺のにとりの首を食いちぎったりワケわかんないこと
言い出すしそれに俺に襲い掛かってきて・・・」

「秀明・・・」

「俺が、俺が・・・じいちゃんを殺したんだ・・・！」

「わかったよ、秀明。後で落ち着いてから話せばいいことだ」

その時森川が突然口から血を吐き、全身に血管が浮き出して苦しみ
だした。

あまりの苦しみに持っていた金属バットが手から落ちた。

カランッ

「ぐあああああ……ッ!!!!」

「!?!」

「もッ森川!!」

「何!?!」

「お前……まさか!!……感染してるのか!!」

「ああ……胸がッ胸が苦しい……ッ!!」

ふと森川の足首を見た秀明は顔色が変わった。

さっき側近にかまれた時点で感染していたのだ、まるで映画と同じ……。

「コイツ噛まれてる!!」

「え!?!」

「もしかしてさっき内山に噛まれたのが……」

「ウン……そんな!!」

「まるで映画と同じだ!!こんなことって……アリかよ!!」

NO・4 生ける屍と嗜虐者

「ぐあああッがはあああ・・・ッ!!」

「う・・・ウソ・・・そんな!!」

「森川ッお前・・・!!」

どす黒い血を大量に吐き、床に膝を着いて大量の冷や汗を流していた。
体中に血管が浮き出し、まるで声にならない悲鳴を上げた。

「うわあああッ!!!!ぐあああッ!!」

「感染してる・・・!!」

俺は全身に震えが走った、未だに状況が理解できずに頭の中が混乱していた。もしも俺の推測が正しければやはりこれはもうとんでもなくヤバイ状況ではないのか？

俺は猟銃を握り締めた、滝川はとっさに森川が落とした金属バットを拾い上げた。

滝川の行動に宮藤は戸惑いの声を上げた。やはり滝川も俺と同じことを考えているようだ。しかし突然のことにそれからどうすべきか分からなかった。

「ちょッ……滝川!!まさか……」
「ぐ……!!クソッ……」

息が荒くなり、バットを構える滝川の腕が震えていた。俺も同じだった。

宮藤は俺と滝川の後ろに下がって震えながらそれを見ていた。

「ぐあああッ!!gsぐてちえhdsethッ!!」

「おい……たッ滝川……!まさか……」

「お前も見ただろッ!!感染したら誰でも見境なしに襲い掛かって、お前の爺さんみたいに……!!」

「く……狂ってる!!」

「でも、やらなきゃこつちがやられる!!」

「そ……そんな」

どうすることも出来ずに宮藤はそう言った。

さっきまで苦しんでいた森川が急に静になった。様子がおかしいと感じた滝川はバットを構え一步前に近づいた。

「どうした?死んだのか?」

「いや……まだわからない」

森川は黙ったまま下をうつむいたまま微動だにしない。俺はチキンなので一步後ろに下がる。

まったくワケがわからない……朝目が覚めてから信じられないようなことばかり起こっている。

俺は悪い夢でも見ているのか?

しかし今はそれを夢だと断定できる証拠も何もない……やはりこれは現実。

俺は唾を飲んだ、滝川はバットの先で恐る恐る森川を一回突付こうとしたその時、突然顔を上げた森川はまるで地獄の亡者のような雄叫びを上げると、滝川の持つ金属バットにつかみかかってきたのだ。

「ギャhg地下じゃghろえ54いj5いえ4おい4gWせdrf

g・ツ!~!」

「うわツ!~!」

「キヤーツ!~!」

宮藤は悲鳴を上げた。驚いた滝川はその場に倒されてゾンビと化した森川に襲われそうになった。

森川は完全に白目をむき、血の涙を流していた。

「滝川ツ!~!」

「ぐツくそ!~!」

刹那、ゾンビと化した森川はなんと信じられないことに片手だけで金属バットを握り潰し始めた。

俺はとっさに持っていた猟銃の銃床でゾンビ化した森川の頭を殴りつけ、動きが鈍った隙に滝川はすぐさまゾンビ森川を押しつけて反撃に移った。

「コノ野郎ッ!!」

「gytリウエイJ56gggg」じつぎゃあああhyy」

「今だ!!滝川ッ!!」

「うおおおーッ!!」

滝川はバットを振り下ろした、それに続き俺も近くにあつたバットで滅多打ちにした。

俺たちはやけになっていた、気がつくとな俺と滝川は返り血を少し浴びていた。

部屋は返り血に染まり、俺は思わず持っていたバットをその場に放り投げた。

あまりの衝撃的な光景に宮藤は言葉を失い、ただ口をぱくぱくさせていた。

「た……滝川……」

「はあ……はあ……はあ……」

「あ……あああ……あ……ああ……」

「とっとかくここを出よう!!アイツらがまたやってくる……」

「

「……そうだな、宮藤!!」

「ああ……ああ……」

頭が潰れた死体を見た宮藤は思わずその場に座り込んで吐いてしまった。

「ううッ……うおええええッ!!」

「おい宮藤！」

滝川は駆け寄って宮藤の背中をさすった、俺はロッカー横に置いてあつたティッシュの箱を宮藤に差し出した。

「大丈夫か!？」

「ゴメン……ちょっと、気分が悪くなって……」

「あれはもう見るな！」

「宮藤、あつたからこれ使え」

「はぁ……はぁ……ありがとう秀明……」

宮藤は震えながらも俺の差し出したティッシュで口の周りを拭いた。滝川が肩を貸して宮藤を抱えて立ち上がった。

「立てるか？」

「うん……もう大丈夫。」

「あまり回りを見ない方がいい、おそらく……校舎の中も酷いことになってるはずだし」

俺たちは部室棟を脱出し、一旦校舎の中に入って一階の一番近くの工作室に逃げ込んだ。

ドアに鍵をかけ、窓側のカーテンを閉めて俺たち三人はその場に腰を下ろした。

「はぁ……一体なんなんだよ！アイツらは……」

「分からない……けど、どうやら生き残ったのは俺たちだけみたいだな……」

「なんて悪運が強いんだ、俺たち……」

しばらく沈黙が続いた。教室の外からはゾンビたちのうめき声や悲鳴が聞こえ、上空を飛ぶ自衛隊のヘリの音が響き渡っていた。

バタバタバタバタ……

「随分と低空飛行だなあ……」

「自衛隊か？」

「たぶんな、恐らく街中がこの騒ぎだし……政府が派遣要請を出したんだろう、朝ニュースでやってたし」

「えッ!？」

「マジかよ……」

「ニュースでウィルスの感染がどうのつっつてたし、それ以前の日の晩にネットの掲示板を覗いてたときにも妙な書き込みあったしな……」

「妙な書き込み？」

「ああ、東京で傷害事件。カップルが男に突然腕を噛み付かれて……そのすぐ直後に交際相手の女まで相手の男が噛み付いて……」

「ていうことは……こんな騒ぎが全国でも……」

「恐らくな、しかし真相が分からない以上は何も確かめようもないってことだけ……」

「そんな……」

「俺にも未だに何が起きているのかワケがわからねーし、最悪の場合。この学校で生き残っているのは俺たち三人だけかもしれない……まったく、世知辛い世の中になったモンだぜ……」

俺は皮肉を言った、滝川と宮藤の二人は不思議そうに俺の方を見た。

「なんか秀明さ、ちょっと性格変わったよね？」

「えッ？」

「俺もなんとなくそう思う！」

「何言ってるんだ？そんなこと言ったらお前らだって俺から見りゃ同じだろ」

「そうか？……そりゃそうだよな、俺ら一人殺っちまってるんだし……」

「……」

宮藤は無言になる。

「あれは人じゃなかった……俺のじいちゃんだって……」

「秀明……」

「あれは……ただの化け物さ」

「……」

「化け物にゃ、死んでもなりたくねえーな……」

俺はそう呟いた。それから俺たちは落ち着きを取り戻し、教室から出ることにした。

いつまでもここに居るわけにはいかない、次期にゾンビがドアや窓を突き破って中に入ってくる恐れもあったので俺たちは覚悟を決めた。宮藤は近くにあった工具箱からバールのようなものを取り出して武器にした。

滝川が仕切る形で俺らはドアをゆっくりと開けた。

「行くしかねーか……」

「宮藤はもう体調は大丈夫なのか？」

「うん、私はもう平気。」

「よし！行くぞ！」

「待て、滝川！」

「なんだよ秀明！」

「流石に金属バットだけじゃ無理がある、これを使え」

俺は滝川にボウガンと残った五本の矢を差し出した。

「矢はここに来るまでに二本使っちゃったからそんなに残ってない、使い方は知ってるよな？」

「分かった、サンキュー秀明！」

「それと、撃つてもあまり効果がない……、コイツを撃つときはなるべく頭を狙え！動きが鈍るからしたら……」

「バットでとどめを刺す……ってことか、わかった」

俺はうなずいた。そして宮藤にも合図し、俺たちは教室を一斉に飛び出して廊下の柱にこそこそ身を隠しながら校門に一番近い昇降口の方へと突き進んだ。

滝川が先頭を走り間に宮藤、そして後ろが俺というフォーメーションで俺は若干ビビりながらも二人においていかれないように必死に走った。

「はぁ……はぁ……クソッ！横っ腹痛てえ……」

「秀明運動不足すぎるだろ！w」

「こんなにな走ったのは中学の頃のマラソン大会以来だぜ……でも宮藤は運動神経いいよな、運動部だし」

「そんなことないよ、私だって長距離走はあまり得意じゃないもの……」

話しながら走っていると、突然先頭を走っていた滝川が立ち止まった。

「どうした滝川？」

「しっ！静に……アイツらがいる！」

「え……」

「静にしたほうがいい、ゾンビは音に反応して襲い掛かってくる」

壁の影から昇降口の方を除くと、下駄箱付近に生徒のゾンビが三人血の涙を流し、白目をむいて辺りをうろうろとしている姿が目に入った。

「ここはダメだな……危険すぎる。」

「どうするの？」

「こうなったら裏口から抜けて外に出るしかないか……」

しかし廊下側の窓から俺は表を見たが、ここもクラスメイトたちの成れの果てがうごめきながら死体の肉を食らう光景が広がっていた。

「滝川、裏口もダメだ……そっちもゾンビの数が多すぎる……」
「クソッ！……とりあえず一旦屋上に逃げて助けを待つしかないな……」
「わかった、行こう」
「うん」

俺たちはその場を引き、階段を屋上目指して足を戸を立てないように駆け上がった。ところが途中でゾンビと遭遇してしまい、驚いた俺は思わず腰を抜かしてしまった。

「グgg@ぼgr5kそえtdrthじゅッ!!」
「わああッ!!」
「クソッ!!」

滝川はバットを横に降り、ゾンビを壁に叩きつけた。

「よし、二人とも今のうちに!!」

動きが鈍っている隙に先を急いだ。しかし俺はとうとう走りすぎで階段の途中で立ち止まってしまった。

「ハア……ハア……」
「秀明！何してんだ!!早く行くぞ!!」

「ちょ……ちょっとタンマ！……俺は後から行くから……お前らは先に行ってる！」

「なにつてんのよ！！さっきのヤツがきちやうわよッ！！」

「……わかった、必ずこいよ！……」

「ああ……ちょっと休んだらすぐ行く」

俺の顔をみた滝川は了解し、宮藤と共に先に屋上へと向かった。

一人になった俺は猟銃を杖代わりに壁に寄りかかってその場に座り込んで一旦メガネを外してYシャツの端でメガネに付いていた血をふき取ってかけ直した。

「ふう、畜生が……」

ふと俺はそんなことを呟いていた。

俺はしばらく死人のような表情でボーっと一点だけを見つめていた。

ここは夢の中なのか？もし夢ならばこんなばかげた夢は今まで見たことがない……。

「まったく……ばかげてるわくッ……くくくッ……ヒヒヒッ！！」

溜まっていたものが少しだけ出たようだった、俺は不気味に薄ら笑いを浮かべた。

もし現実だとしても、こんなに都合のいい夢は無いさ……。

だとしたら……この世界は俺の天下！？

だがその時、ちょうどその回から女子の悲鳴が聞こえた。

「キヤーッ！！！！」

「!?!」

一瞬ビビった、まさかまだ校内に生存者がいたのか？
俺は立ち上がって声のする階へと向かった。

「さっきの声、宮藤じゃなかったな……」

声が出したのは俺のクラスの教室の階だった、教室の近くまでやってきた俺はそこで人影を見た。

「!?!」

俺はビビりながらも猟銃を構えて臨戦体制に入る。
なんとなくだったが、今なら生きているヤツでも撃ち殺せるような気がしていた。

「どこだ……?どこに居やがる?……」

ガタッ

「!?!」

教室の中から物音が聞こえた、俺は恐る恐る自分のクラスの教室へと足を踏み入れた。
中を見渡すと、やはりここも酷い有様。そこらじゅうに血が飛び散り、机や椅子が滅茶苦茶に倒されていた。

「ん？」

黒板前の教卓の下から足が見えた。俺は唾を飲み込み、銃を構えてゆっくりと近づく。
そして俺はこう言い放った。

「出てこいよゾンビ野郎！！とだま吹っ飛ばしてやんよ！！」

俺の声にビビったのか、教卓の下から見えていた足がビクッと動いた。

やはり生存者がいたのか！

「どうした屍？ああそうか！死んでるからもう人間の言葉は通じないのか……じゃあ、もう何も言う必要もないというワケかw
w
「違う！！私は死んでないわよ！！」
「！！！！？」

教卓の影からそれは姿を現した。俺は目を疑った。

城ヶ崎嘉穂……。

まさかスイーツが一匹しぶとく生き残っていたとは……ってそんなことじゃない!!

俺は慌てて猟銃を後ろに隠す。

「どええ!? あっ……アンタはスイーツいや城ヶ崎?!」

俺は指差して言った。

城ヶ崎はこんな非常下でも相変わらずのご立腹のようで、怒りながら俺に文句を言ってきた。

「なんなのあなた!! 人を死人呼ばわりしてッ!!」

イラつくので俺も言い返した。

「っち! めんどくさいのが生き残っていやがったか……」

「なッなんですってッ!? ……あなた、私のクラスの浦島秀明くんね……」

「なんで名前知ってんの?」

「当然よ、私は優等生よ?」

「プッ……くくく!!」

俺は思わず吹いてしまった。世界がたった一日でぶっ壊れてしまったというのにこのスイーツ女ときたら……。もはや笑わずにはいられなかった。

もうこの際、徹底的に追い詰めてこれまでの不満をはらしてやろうと俺は考えた。

もはや俺には怖いものなどなにもないのだ……。
だって今、この世界は俺の天下だ！！

「嫌ッ……。いやぁ……。そんな！！」

「っち！てめえの都合が悪くなると俺に媚を売るつもりか……。まったく、反吐が出る！！」

「うるさいッ！！もういい加減にしてよッ！！」

涙目になりながら俺に怒鳴り散らす、しかしただ殺すにはもったいないくらいだ。肉バイブにしてから殺すか？

イヤッ、俺にはとてもそんな勇氣はない……。ていつかわざわざ三次元とヤツてやるほど性欲ねーし。

流星は万年賢者タイム！次元を超越した俺にはもやは三次元なんぞ敵ではないわッ！！

お嬢様激怒、俺爆笑。なにこの状況w

だがしかし突如教室内に物音とうめき声が聞こえ、俺と城ヶ崎は静まり返った。

「あッやべえ……」

「ああ……。あ……。！！」

「後ろだッ！！」

城ヶ崎の顔色が変わり彼女はパニックになる。

「ギヤアアーツ!!!」

「ブ部ごあがあげらう5jyjじ74kwきy」

しかしブタ原は城ヶ崎の首をつかんで上に持ち上げてそのまま締め上げた。ゾンビ化の影響で握力まで上がったとは、まさにバケモノ・・・。

城ヶ崎は苦しみだしてブタ原の腕をつかんだ。俺はこの時まだ自分の中での城ヶ崎に対する憎しみがあつたがそれ以上にブタ原に対する怒りが上だった。

その瞬間、俺の中で迷いが消えた。

「ぎゃツ・・・ぐアツ!!!ぐ・・・!!!はツ・・・離し・・・
てえ・・・!!!苦しいよオ・・・!!!」
「ぎいおk f l d k j r j k t l あくえ r f r g t p r i ぽツ!!!」
「うう・・・」

城ヶ崎は俺の方を見て苦しみながら涙を流した。気がつけば俺は廊下で銃を構えている。

怯えだす城ヶ崎、彼女は俺を見た。

俺は銃口を城ヶ崎に向け、照準を合わせ疲れた目で見つめた。

「うう……う……」

力が衰え、腕を下ろす城ヶ崎。そして俺は彼女に言った。

「俺には嫌いなものが三つあるって知ってたか？……」

「……う……う……」

「ウが亜gsれshjryきI9yppyおぼkrghtr-ッ!

!-!」

「クソ豚が……てめえに言っただよ醜い家畜野郎。」

「でゅおれええrbkgrfy??!」

「知らねえなら教えてやるよ醜いバケモノ。」

「つりりやじじjgfmまあfdgrぐんngてる」

俺にはもう何も怖いものなど無かった……。

今俺のいるこの世界は俺の天下なのだから。

こんなにもリアルで生々しい、そして血生臭い夢……俺には迷いなどあるはずがなかった。

「ガキと、腐女子と、貴様らだ……。」

虚ろな目で俺は引き金を引いた。

そして刹那、轟く銃声。

上下二連銃は上の銃口から火花が出ると共にバケモノの頭部をぶつ飛ばした、城ヶ崎を掴んでいた手が離れて城ヶ崎はそのまま廊下の床の上に落とされた。

頭がすっかり無くなったブタ原の下半身は活動を停止してその場に膝を着いて倒れた。

辺りは返り血に染まり、城ヶ崎の制服にも少量の血が飛び散っていた。

すっかり怖がり、生まれたてのヤギのように震える城ヶ崎を見て俺は銃を下ろした。

「あの世でせいぜい夢を見るがいい……ゲイヲタモンスター」
俺はそう言って膝を着いていたブタ原の下半身を前から蹴飛ばして倒した。首からはどす黒い血が流れ出てさながら中華料理の肉汁のようだった。

「ああ……あ……ああ……ッ！」

城ヶ崎の方へ近寄った俺は彼女に銃口を向けてニヤッと笑った。すると城ヶ崎は更に怯えだし、後ろの壁に背中をくっつけた。

「嫌……やめてよ……殺さないで……」

泣きながら怯える城ヶ崎に、俺は問いかけた。

「お前、死にたいか？それとも生きたいか……？」

その問いかけに城ヶ崎は震えながら答えた。

「いい……いッ……生きたい……!!」

「そうか、生きたいか……俺も同じさ。」

俺はそう言うと再び彼女に銃を構えて引き金に指をかけた。その行動に城ヶ崎は泣き叫び命乞いをした。

実にいい気分だ、いつも生意気だったヤツをここまで精神的に追い詰めることができたことに俺は満足だった。

「嫌!!やめて……お願い!!殺さないでくださいッ!……
・今までのこと誤りますから!!」

迷うこともなく俺は引き金を引く。

「嫌あーッ!!」

カチンッ

軽い金属音が響く、不発でもなく弾切れであった。

二発しか撃てない銃だったので俺はそれを知っていてわざと暴挙に及んだのだ。

そして城ヶ崎は静かに泣き崩れてよっぽど怖かったのか、失禁してまった。

「うう……うう……うう……」

しまった……ちょっとやりすぎたか？

流石にちよつとやりすぎたと反省、しかしそんなことを気にしている暇はなかった。さっきの銃声でゾンビが近づいてきていたのだ。絶体絶命、俺は必死に腐れきった脳をフル回転させて考えた。

そして俺は泣き崩れる彼女に言った。

「お前、たしか生きていつて言ったよな？」

「へ……？」

「もしホントに生き残りたいのなら、屋上まで俺についてくることだな」

俺はそう言つてその場から走り出した。そのあとちよつとしてからすすり泣きながら立ち上がった城ヶ崎は俺の後を走った。

何故彼女、城ヶ崎を殺さずに生かしておいたのか、それは俺自身が生き残るためだった。

もしもの時の囿にするために俺はコイツを生かしておくことにした。

とりあえず餌があれば俺はその間に遠くへ逃げ延びることができる

からだ！！

え？俺が悪魔だって？

違うね、俺はこの世界の神なのさ……。

だから生かすも殺すも俺次第、だってこの世界は俺の天下だしw

だってこの世界は俺の妄想。そしてただの夢、幻想なのだからな……。

一方でその頃、滝川と宮藤はさっきの銃声を聞きつけて屋上から引き返して校舎内に戻ってきていた。
家庭科室にひとまず逃げ込んでドアに鍵をかけて隠れていた。

「ねえ滝川、やっぱりさっきの銃声……秀明になにかあったのかな？」

「大丈夫だよ宮藤！秀明なら心配ない……。」

「でも……ダメ、私心配になってきた！」

近くにあった包丁を掴んで教室を出ようとする宮藤に滝川はあわてて止めに入る。

「待て！落ち着けよ……！今お前が出てったところでアイツらに襲われて一巻の終わりだぞ……！」

「分かってるけど……でも、もし秀明が……」

「大丈夫だよ！アイツなら……秀明はこういうようなテレビゲームよくやってるから対処できてるはずだ！」

「ゲームって……」

「とにかく、心配ない！俺たちは信じて待つしかない！お前は先に屋上に避難してろ」

「えッ！滝川はどうするつもりなの！？」

「俺は秀明を助けに行く！」

滝川その言葉に宮藤は首を振った。

「嫌よ！そんなの！私も一緒に行くわ！……もし滝川、アンタまで襲われたら私はどうすればいいの！！」

「もしもの時は俺たちに構わず一人で非常階段を下りて逃げろ！」

「そんな！嫌よ！！」

拒絶する宮藤の手を握り、滝川は言い聞かせた。

「分かった、約束する。必ず秀明を連れて戻ってくる！だから待っていてくれ！」

「でっでも………わかったわ、必ず生きて帰ってきて！」

滝川はうなずき、宮藤を屋上へ向かわせて一人秀明の下へと向かった。

その頃、俺はゾンビの徘徊する校舎内をゾンビと出くわさないように慎重に歩き進んでいた。

刹那、俺は気配を感じてふと後ろを振り向くと、城ヶ崎が俺のすぐ後ろにいて思わず驚いた。

「うわッ！………て、なんだよ……脅かすなよ！」
「……………」

しかし彼女は悲しげな顔で下をうつむいたままなにも答えようとはしなかった。

俺は軽いため息をついた。

「はぁ………なんとか滝川たちの所に行かないとな………」

しかしその刹那、向かい側の教室からドアを突き破って数体のゾンビが現れて俺と城ヶ崎に襲い掛かるうとしてきた。

「ggY儀Wsggrzkrs5hymk978trくおいげnykt
「！！」
「うわぁッ！！」
「ひッ！！」
「くそッ！！」

俺はとっさに城ヶ崎の手をつかみその場から一目散に走り出した。

「このまま屋上まで突っ走るぞ！！」
「えッ！ちよっと………」

階段を駆け上がっていると、偶然にも途中で滝川と出くわした。

「秀明!!」

「おお滝川!!」

「よかった、無事だったか!!」

「ああ・・・なんとかな・・・」

「城ヶ崎さんもいたのか？大丈夫か？」

「私は平気よ・・・ずっと教室に隠れていたから・・・」

「そうか、とりあえず今は話は後だ!!屋上で宮藤が待ってる、急ごう!!」

階段を再び駆け上がって俺と城ヶ崎と滝川は四階屋上の入り口の前にやってきた。

屋上に入る扉の前には宮藤の姿があった。

「宮藤!!」

「秀明!滝川!!・・・よかった・・・」

安心した表情で宮藤は俺と滝川を見た。

「城ヶ崎さんも無事だったの？」

「ええ・・・浦島君に助けてもらって・・・」

「それより宮藤、屋上に入らないですつとここで待ってたのか？」

「ドアが開かなくて屋上に入れないの!!」

「えッ!!」
「何!?!」

滝川はあわててドアノブをつかんで開けようとするも、鍵がかかっていて扉はびくともしない。
やばいぞ・・・このままでは俺たちは下の階のアイツらに食われてしまう!!

俺は真っ青になり、握っていた城ヶ崎の手を強く握り締めた。

「いッ痛い!ちょっと」
「えッ?あ、スマン・・・」

俺は慌てて城ヶ崎の手を離す。
一方で屋上の扉が開かず、滝川は金属バットで扉の鍵を叩いて壊そうとしていた。

ガンッ!!ガンッ!!ガンッ!!

「くそッ!!開けッ!!このッ!!」

しかしその音に反応して階段のほうからうめき声と足音が近づいてくるのがわかった。

「おい滝川!!不味いぞ!!奴らが音に反応してここへ上がってきた」

てる！！」

「畜生！！なんてことだ……」

「どっとうすんのよ！！このままじゃ私達、あのバケモノの餌食になっちゃうわよ！！」

「宮藤落ち着け！……なにか他に入り口はないのか！？」

滝川は必死に辺りを見回す。その時、俺はあるものが目に入りそれを指差した。

「滝川！！あそこからは出られないか？」

俺が指差した方を見ると、扉の横にダンボール箱に隠れた小さな窓があった。

「あの窓から出られないか？」

「……分らない……でももう他に出口はない！ダンボールをどかすから三人とも手伝ってくれ！」

「ああ」

「分かったわ！」

「……」

城ヶ崎は暗い顔をしながら何も言わなかった、滝川は本の入ったダンボールを足場に他のダンボールを退かし、俺と宮藤は退かしたダンボールで階段を作った。

「とりあえず足場はこれでオッケーね！」

しかしゾンビがどんどん近づいてくる。俺は猟銃を置き、近くにある掃除用具入れのロッカーや棚を倒して階段にバリケードを築き、ゾンビの進入を可能な限り防ぐようにした。

「ギユゲfgrghjき8おう19うy8!!」

「クソツ！宮藤、手伝ってくれ！」

「わかったわ！」

「わ・・・私も手伝うわ！」

城ヶ崎も加わり、滝川が出口を開いている後ろでバリケードを築いていた。

しかしゾンビがバリケードの隙間から手を伸ばし、宮藤の腕をつかんできたのだ。

「キヤーツ!!」

「!?!」

「宮藤!!」

「嫌ツ!!離してツ!!」

「ホウエrゲhjy8おm8お1trbbvgtt5くえrxfctc
gffy!!」

「この野郎!!」

俺はとつさに猟銃をつかみ、銃床でゾンビの腕を叩いてへし折った。ゾンビはその後ろに倒れ、階段を転げ落ちた。

「宮藤大丈夫か？」

「はぁ……なッなんとか……」

滝川は宮藤の元へ駆け寄る。しかし落ちたゾンビは再び立ち上がりこちらへ上がってきていた。

急いで滝川はバットで小窓の窓ガラスを割って脱出路を確保した。

「おい滝川、まだか？」

「ちよつとまで！……よし！いけるぞ！！」

窓は人一人通れる大きさだったので先ずは滝川が先に窓から外に出た。

「〜大丈夫だ！屋上は誰もいないぞ！！宮藤から先に来い！！〜」
「分かったわ……」

宮藤はダンボールを上って窓から顔を出すと、そこからゆっくりと身を乗り出して下には滝川が待ち構えていた。

「ちゃ……ちゃんと受け止めてよ！」

「大丈夫だ、さあ早く！」

息を深くはいて宮藤は窓から飛び降りた。滝川は宮藤を抱きかかえるように支え受け止めた。

しかし今はそんなことを考えているような場合ではなかった。

表では滝川と宮藤が窓の下で城ヶ崎が降りるのを待ち、俺はその間生きるか死ぬかの瀬戸際に追いやられているような状況だ。

「城ヶ崎さん!!早くこっちに!!」

「急いで!!」

「わ……分かってるけど……」

覚悟を決めて窓から飛び降りた城ヶ崎、窓の下で待ち構えていた滝川が受け止めて下ろした。

「もう大丈夫だ、宮藤!城ヶ崎さんを頼む!」

「やっと出られる……さて、さっさとこんな地獄とはおさらばだぜ!!」

城ヶ崎が降りたのを確認した俺はバリケードをゾンビの方へ押し倒して猟銃片手にダンボールの足場を上り、小窓から顔を出して滝川たちを見た。

「よっと」

「秀明!急げッ!!」

しかし刹那、飛び出ようと身を半分乗り出した時に俺の片足にゾンビの手がつかみかかってきたのだ。

その瞬間俺は顔が真っ青になって錯乱した。

「へ？」

「くえ r c f t v ん b b j y t h r y, k y j ぼ p ぼせgg-
!?!」

「うわああーッ!?!」

「秀明!?!」

「秀明どうしたー!?!」

顔面真っ青、汗が滝のように流れた。

まずい!?!このままでは確実にやばい!?!このままだと俺はゾンビの仲間入りだ!?!

俺は焦り、必死に片足でつかんでいたゾンビの腕を蹴った。

「離せ!?!離せってんだクソ!?!」

「秀明!?!まってる!?!今助ける!?!」

滝川は俺の腕をつかんで俺を引っ張り下ろそうとした。俺は今左右から別々な方向に引っ張られている状況だった。

そして痛い。

「いでッ!?!いでッ!?!」

次の瞬間、ゾンビが負けて俺は滝川に引っ張られて屋上の外に飛び出した。

俺はそのまま滝川の頭上に落下し、俺と滝川の頭に大きなたんこぶが出来上がってしまった。

「痛ッだーッ!！」

「いてて……くそ……身体が真っ二つになるかと思っただぜ……夢なのに痛い」

「秀明……大丈夫か？」

「お前こそ頭大丈夫か……いてッ……て、俺も人のことは言えねーか」

「秀明……」

「俺は大丈夫だ、足つかまれただけで噛まれちゃいねーよ」

「そうか、よかった……」

ふと降りてきた窓のほうを見上げると、中からゾンビたちが血まみれの手を出して今にも襲い掛かるうといわんばかりに腕を伸ばしていた。

「うわッ!！」

おもわずビビッた俺はその場に腰を抜かした。

しかしそれ以上に驚いているのは滝川と宮藤だった。金網越しに街のほうを見た二人は眼に入ったその光景に言葉が出なかった。

「ウソ……なにこれ……」

「そんな……マジかよ……」

中野原市全体のあちこちから黒煙が立ち上り、あちこちから救急車

やパトカーそして消防車のサイレンの音が響き渡っていた。城ヶ崎もシヨックのあまり言葉を詰まらせた。

「まるで戦争みたいだぜ……………」

俺は呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7259y/>

屍たちの鎮魂歌

2011年12月20日01時45分発行